
鈴と残り少ない命の双子の妹

梨音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鈴と残り少ない命の双子の妹

【Nコード】

N0159Y

【作者名】

梨音

【あらすじ】

鈴には双子の妹がいた。性格は鈴よりもやんちゃで問題児だった。その子の名前は美音。

意味は美しい音。

鈴と合わせて鈴の音は美しい音色と意味。

いつもふたりは一緒にするにもどこに行くのもそして、好きな人もただ美音には違ふところが1つあるそれは、日光に当たれないこと。

そんな病気など気にしてないぐらいにいつも笑顔で笑っていた。

転校生はダブル幼なじみ（前書き）

思い付きではばばつと書いてみました。
ちよつとエロいですよ。
それでは本編どうぞ。

転校生はダブル幼なじみ

翌朝のクラスではある話題で持ちきりになっていた。

「ねえ、織斑君。転校生の話聞いた？」

「転校生？ 今の時期に？」

入学式が終わって1ヶ月も満たない時期に転校生って事は……。

「このセシリア・オルコットの存在を危ぶんでの転入かしら？」

我がクラスの代表候補生セシリア・オルコットはいつものように腰に手を当てて登場。

「うちのクラスに転入して来る訳ではないのだから関係ないだろ」

窓側の一番前にいた箒がいつの間にか俺の机の前にいた。

「少なからず代表候補生って事だよな。どんな奴なんだろうな？」

「む、気になるのか？」

「少しな」

箒は、明らか不機嫌になってしまった。
俺、なにか悪いことでもしたかな？

「今は他の女の事を考えてる隙はないだろ！」

「た、確かに……………」

来月にはクラス対抗戦がある

「そう！　そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

『だけ』という部分をやけに強調されたが…………　まあ、確かに他のクラスメイトに頼むとなると訓練機の申請と許可、整備に丸一日はかかってしまうから、手っ取り早く模擬対戦するならセシリアに頼むのが早い

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきますえんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

セシリア、箒、クラスメイトと口々に好きなことを言ってくれる。そうは言われても、ここ最近はISの基本操縦でつまずいていて、とてもじゃないが自信に満ちた返事はできない。

「織斑君、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもねー」

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

やいのやいのと楽しそうな女子一同に俺は「おう」とだけ返事をする。

「その情報、古いよ」

ん？ 教室の入り口からふと声が聞こえた。なんか、すげえ聞いたことのあるような声だが……。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そうか。」

がしゃん。

「よう、一夏。元気してた？」

「うわっ！ 美音^{みおん}！」

突然机の上に降ってきた女の子は俺の顎を引き顔を見せる。

「なんで驚くんだよ。初めてを交わした中でしょ？」

「ちょっと美音！ 邪魔しないでよ！ てか、初めてなんて交わしてないでしょうが！」

「うるさいなー鈴。初めては交わしたよファーストキスもね」

「てか、美音パンツが見えてるぞ！」

「見えてるじゃなくて見せてるの」

顎から手をどかして美音はスカートをパタパタと仰ぐ

「ば！ バカ！ なにやってんだよ！？」

「一夏を興奮させてる」

俺の手をすり抜けて床に降り立つ美音はくると回って鈴の元に戻る。

「自己紹介がまだだったね。あたしは中国代表候補生の凰 美音よ。そしてこのちんちくりんのがあたしの姉の凰 鈴音同じく中国代表候補生ね」

「おい」

「なによ！？」

「ん？」

バシンッ！聞き返したふたりに痛烈な出席簿打撃が入った。しかも美音だけは拳骨だった。

「痛いなー。千冬」

バシンッ！

「目上には敬語を使い、そして教員を呼び捨てにするな。ここでは織斑先生と呼べ」

「す、すみません……」

「えー、良いじゃん。」

バシンッ！

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「は、はいっ！」

「あたしはここだし」

鈴は二組へ向かって猛ダッシュ。うん、昔のままの鈴だな。しかし問題は鈴じゃない。

「おい、美音。自己紹介は済んだのか？」

「一応ね。ある部分は隠したけど」

問題は鈴の双子の妹の美音だ

「そうか、なら席に付け」

「はいはい。」

そう返事をしてこっちに向かってくる。

「……一夏とのえっち気持ちいいよ」

「「なっ！」」

「み、美音！」「冗談を言うな！」

バシンバシンバシンバシンバシンバシンバシ！

「席に着け、馬鹿ども。そして、美音。冗談は大概にしるよ」

「ふふ、冗談にしといてあげるわ。あ、後授業中はあたし寝てるからね」

そう言って廊下側の一番奥の角席に座る。

「お前は、起きてるより寝てる方が静かだから寝てる。さて、SHRを始めるぞ。」

そして、今日も1日ISの訓練と学習が始まる。

（あの女子は一体何なのだ……一夏とずいぶん親しそうで……し、しかもファーストキスまでしてるとは）

朝の一件が気になって、筈はなかなか授業に集中できないでいた。そして、ちらりと一夏と美音の方をうかがう。一夏は昨日の授業での失敗を尾を引いているのか、真面目にノートを取っていて。美音の方は宣言通り寝ている。

（あの女子寝顔が可愛い）

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ!？」

突然名前を呼ばれて、篝は素っ頓狂な声を上げる。　　そうだ、今は授業中。それも山田先生ではなく織斑先生の時間だった。

「答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

ばしーん！　といい打撃音が響いた。

「仕方ない。オルコット」

「……例えばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な……」

「……………」

ばしーん！　ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によって圧縮された。

「美音、答えろ」

「うっ？　どれ？」

「これだ」

千冬姉の声で起きた美音は両目をゴシゴシ擦って千冬姉の質問に答えた。

「お前とあいつの関係は一体何なのだ！」

「そうですわ！」

昼休み、開口一番篤とセシリアが文句を行ってきた。

「関係って言われてもな……」

「一夏とあたしは体の関係よ。ねえ、一夏」

「冗談はよせよ。まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」

「あたし、お腹減ってたんだ。それに学食で鈴が待ってると思うよ」

「そうか、それは急がないとな」

あいつうるさいしなと付け足して一夏たちは学食に移動した。

「待ってたわよ、一夏！」

どーん、と俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転入生、凰鈴音だった。ちなみに俺は略して鈴と呼んでる。

しかし変わんねーな、こいつ髪型も昔から一貫してツインテールだし。美音もそうだな、こいつは止めてないけど。

「うーんあたしなに食べようかな？」

券売機の前で格闘している美音を見て俺は日替わりランチのボタンを押した。

「俺のと同じでいいだろう。お前なんでも食うだろ」

「失礼ね。あたしだって好みはあるわ。まったく」

「悪かったよ」

美音は、ぷくつと頬を膨らまして鈴を強制的にどかして食券をおばちゃんに渡した。

「なあ、美音。」

「なに？」

「お前昔に比べて可愛くなったな」

「っな！？ 当たり前でしょう！！ あたしだって大人になったんだから！ てか、鈴には言わないわけ！！」

「鈴も可愛くなったけど、お前ほどではないぞ」

「なにそれ、あたし妹に負けてるわけ？」

いや、胸の大きさに負けてると思うが。

「い、一夏？ それってあたしを口説いてるのそれともお世辞？」

「うん。まあ。どっちでもないな」

「はあ。やっぱり、体まであげたっていうのに。はあー。」

「ん？」

最後の方は小さく言って美音は日替わりランチを持ってスタスタと行ってしまった。

「一夏、いつか美音にナイフで刺されるわよ」

鈴も物騒な事を言って美音元に行ってしまったので俺も追いかけた。

「美音、大丈夫なの？」

「大丈夫だと思う」

ずっーんと沈んでいる美音鈴が優しく介抱していたところだった。

「美音って体弱かったけ？」

「そうでもないわ。ただ。。」

「ん？」

最後の方が聞こえず聞き返したが美音はごまかした。

「なんでもない。さあ、ご飯食べましょう。」

「まあ、そうだな」

「アンタクラス代表になったんだって？」

「おう、成り行きでな。そんなことよりお前たちいつ代表候補生になったんだ？」

「あたし本当は、なるつもりなんてなかったのよ」

鯖の塩焼きの骨をほぐしていた美音がぼそりと呟いた。

「じゃあなんで？」

「なんでって。アンタに会いたかったからよ」

「み、美音！？ 変なこと言うなよ確かにお前にファーストキスは奪われたけど。お前が好きなのは弾だろう？」

「やっぱり、アンタはなんもわかつちやいないね」

そう呟いてから美音口を開かなくなった。ただずっとご飯を食べつづけている。

「鈴、美音どうしたんだよ」

「それ、あたしに訊くの？」

「いや、俺はさっぱりだから」

「一夏、体調悪くなったから午後の授業休むから。千冬に言つて」

黙って食事をしていた美音がそう言つてトレーを持って食堂を出て行つた。しかも、少量だった食事は残っていた。

「再会の時は元気だったのに大丈夫かな？」

「大丈夫よ。それよりさ、今日の放課後って時間あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

「そ、そう……なんだ。じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？ 美音も連れてくるから。じゃあね、一夏」

「うゝ。気持ち悪い」

ボフツとベッドに倒れる美音。

「なに？ つわり？」

「失礼ね。鈴、そんなわけないでしょ」

ドアに寄りかかる鈴を見ずに美音は言う。

「どうだか。まあ、アンタは体があまり強くないんだから気をつけなさいよ」

「わかってるわよ。まったく心配性なんだから」

「妹を心配してなにが悪いのよ」

美音が横になってるベッドに鈴をかけて頭を撫でる

「ふふ。そうだね。」

「アンタ、食べれない魚なんて食べるからよ」

「だって、一夏が選んでくれたから」

「一夏は渡さないわよ」

「鈴には無理よ。一夏は私にぞっこんなんだから」

「ねえ、アンタ中学の時に一夏とやったって、本当なの？」

ぴくんと体を震わせる美音。

それがなんか肯定にも感じられた。

「なにいつてるのよ鈴。やったんだったらデキてるでしょ？」

「そうね。ただの噂みだったし」

「そうよ。私はその噂で一夏をいじってるだけよ。」

「ふん。千冬さんは知ってるけど、あんまり日光に当たるんじゃないわよ」

「わかってるわよ」

あたしは、あんまり日光当たれない。そういう病気だから、外に出るときは夏でも長袖長ズボンで帽子じゃないと外に出れない。知ってるのは家族と千冬だけ、後は人はなにも知らない。

「あたし授業出るから、なにかあったらISのプライベートチャネルで呼びなさいよ」

「はいはい。頑張ってる」

ボタンとドアが閉まり鈴は出て行く。

「はあっ、寝る」

そうつぶやいて、美音は眠りに入った。

むあー。

（なんの音だろう？）

ポタポタ

（水の音？）

ぴたつと額になにかが乗る。

「ん？」

「あ、悪い起こしちゃったか？」

「一夏。大丈夫だよ」

「そうか、良かった。具合どうだ？」

「うん。だいぶいいよ。ところで授業は？」

時計を見るとまだ授業は終わってない。それなのに一夏が目の前にいる。

「おう。抜け出してきた」

「バカ、早く戻れ」

ぽこんと一夏の頭を叩く。

「わかったよ」

「よろしい」

頭をなでなでしてやる。

「美音、お前って昔からすぐに体調崩すけど、どこか病気なのか？」

「さーね。いい女には秘密が多いものよ。」

「そうかよ。あんまり無理すんなよ」

「わかってるわよ………ねえ、一夏あの時の事覚えてる？」

不意に美音の声が小さくなつて弱々しく聞こえた。

「あの時ってあれか？ お前が初めてを奪った後に続けた言葉か？」

「うん。そうだよ」

美音は深く息を吸って言葉を続ける。

「高校を卒業したら結婚する約束だよ」

「ああ、だから誰にもなびいてないだろ？」

「その約束ね。忘れていいよ。」

「な、なんでだよ！？」

「さーね。なんででしょ　　っ！！」

いきなり口を塞がれた。

「いまさら忘れること出来るかよ」

「い、一夏にしては強引ね」

「うつせえ」

「一夏、続きいいよ。したいんでしょう？」

美音は、起き上がり服の帯をほどく。

「美音」

「なに？ 一夏」

「俺はそんなことがしたいんじゃない。お前が言ってる意味を訊いてるんだ」

「……………」

手を止めて顔を伏せる。どこか顔を見られないよしているようだ。

「美音」

「出てって」

「美音！？」

「いいから出てってって言ってるでしょ！…」

「わ、わかったよ」

枕を投げられたので一夏は慌てて部屋の外に出て行った。

「一夏の馬鹿。私の気も知らないで……。」

バサツと布団をかぶる。

放課後、鈴が美音を起こしにきた。

「美音、生きてる？」

「死んでるー。」

布団から顔を出さずに美音は答える。

「行くわよ」

「どこに？」

「学食に」

「日光に当たり過ぎたわ。食欲がない」

「そう。じゃあ少し夜の散歩してきたら？」

「そうしようかな」

もそもそと布団から出て上着を羽織る。

「じゃあ、夜のお散歩行ってくるね」

「いつてらっしゃい。気をつけなさいよ」

「はいはい」

ぱんつと鈴とハイタッチして別れる。

「はあー。私が唯一自由に動けるのは夜だけ、私の友達はお星様とお月様と真っ暗な闇だけね。」

IS学園裏側に林がありそこを向かって美音は歩いている。

「おい、美音」

「あ、千冬さん」

林に向かう途中に千冬さんに声をかけられて振り向く。
闇を纏っているみたいな黒いスーツを着ていた。

「お前が珍しいな私の事をさん付けするのは、なにか合ったのか？」

「なんにもないですよ。ただ寂しくなっただけですよ」

「そうだな。ここではお前の病気のことを知ってるのは鈴と私だけ」

だしな」

千冬は美音に近づきぽんと美音の頭に手を置く。

「うん。一夏には病気だからって特別優しくされるのがイヤだから絶対に言わない」

「した中だろ？」

「そんな事関係ない。それにあたし、そう長くないしね」

長く生きて20まで短くて16までで最近は病気が安定しなくて少しの日光に当たっただけで気分が悪くなり、下手をしたら命の危機に陥る時がある。

この事は千冬以外知らない。

「そうか、長くて4年短くて……。」

「うん、もうすぐ。別に死ぬのは怖くない。だって、さんざん死にかけたし。」

にははっと笑う美音はどこか悲しくでもしっかりとした意志を持った顔だった。

「最期かもしれない夜の散歩行ってくるね」

「私も散歩がしたくなった。着いていこう」

「珍しいね」

「嬉しいだろ？ 義姉と一緒にの散歩は」

「千冬さん。あの話ね、なしにしてもらったわ」

美音声のトーンが少し下がった気がした。

「諦めたのか？」

「そうじゃあ、ないけど……。もうあたしばかりに縛られるのは可哀想かなって思ってたね。そしたら強引にキスされちゃった。」

「お前がそう想っていてもあいつはそうは想ってないかもしれないぞ」

「うっん、いいのただ最期の時まで近くにいられるだけでね。だからここに來たの」

そのためだけに代表候補生になった。

鈴よりもいっぱい体を鍛えて、いっぱい勉強して。

「お前、今の目は死を恐れている目だぞ。」

「そんなことない。私は死ぬつもりでこの学園に來た」

「わかった。最期は私が看取ってやろう」

千冬は美音の頭を撫でる。

「にはは。ありがとう、義姉。」

「なにか、飲むか？ 特別だ奢ってやろう」

「やったあ！ じゃあ、自販機行こ」

美音は千冬の手を取って引つ張る。

それを千冬は苦笑しながら『おう』と答えてついて行く。
どこか、姉妹ではなく親子に見えた。

「一夏あ！」

あたしは学食に入るなり一夏を見つけて話しかける。

「おう、鈴。美音は？」

「体調が悪いから夜の散歩しにいったわ。」

「そうか。まあ座れよ」

「うん」

数人が座ることができるテーブルに一夏、箒、セシリアが一夏を挟むように座っていたのであたしは一夏の前側に座るようにした。

「で、なんでこいつらがいるわけ？」

「いいじゃねえか。食事はみんなで食った方がうまいぞ。」

「まあ、いいわ」

ぶすつとしたかったがやめた。

今は強敵の美音が居ないんだから、チャンスよね

「なあ、鈴。美音って病気なのか？」

「え、さあー。あたしは知らないわ」

「本当か？」

「本当よ。てか、なんでいない人話をするのよ！」

本当こいつは美音美音って、あー、腹立つ。ぶん殴ってやろうかしら？

「そうだな。すまん。あ、言い忘れたことがあったぞ」

「な、なに？」

「小中学の時の友達に連絡したか？ おまえたちが帰ってきてるって知ったら喜ぶぞ。」

「そ、そうかな？」

あんまり、いい思い出なかったし。

美音が病気でいつも体育を休んでいてそれでいじめが多かった。

「ん？ どうした？」

「ううん。なんでもない」

「なにかあるんだったら言えよ。力になるから」

「うん。ありがとう」

「おばさんたち元気か？」

「う、うん。元気だと思う。」

「ん？」

「一夏そろそろどんな関係か教えて欲しいのだが」

「もしかして、こちらの方もしくは美音さんと付き合ってるっていらっしやるの！？」

箒とセシリアが多少棘のある声で訊いてくる。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「鈴は幼なじみだよ。美音はそんな感じかな」

「「「え!?!」」」

バンってテーブルを叩いて立ち上がる。

「な、なんだよ!?!」

「アンタ美音と付き合ってた訳!?!」

「美音さんと!?!」

「う、嘘だよな!?!」

3人で一夏を揺する。

「お、おい。やめろ!?!」

「早く言いなさいよ!?!」

「わ、わかったから離せ!」

離された一夏はこほんと咳払いをしてから説明を始める。

「俺と美音は付き合ってるわけじゃなくて、アイツ強がっちゃいるが体が弱いから支えたい守ってやりたいと、思ってるだけだよ。」

「な、なんだ。そういう事なんですの」

「な、なんだ。そんな事か。」

「……………」

箒とセシリアは安堵の声を漏らすが鈴だけは顔を伏せている。

「鈴？」

「アンタ、それ美音に言っていないでしょうね？」

「あ、ああ。言っていないが」

「そう、ならいいわ」

ぱつと顔を上げて言葉を続ける。

「アンタ、その言葉絶対に美音に言っんじゃないわよ」

「なんでだよ」

「アンタが美音の事をなんもわかってないからよ」

「どういう意味だよ」

「アンタ本当に美音の事が好きみたいね。いいわ、耳貸しなさい」

ちよいちよいと手招きで鈴は一夏を呼ぶ

一夏は頭の上に？マークを浮かべながら鈴の隣に行き耳を傾ける。

「……………美音は日光に当たれないのよ」

「は？」

一夏は鈴の言葉を理解できていないみたいで？マークが頭の上にたくさん出ていたが鈴はお構いなく続ける。

「……いつも厚着だったでしょ？」

「……だからって日光に当たれないってなんで？」

「ああっもう。アンタは本当バカなんだから！！美音はそう言う病気なのわかった！！」

「うおっ！！」

耳元で大声を怒鳴られたので一夏は耳を押さえて身を引く。

「あたし帰るわ」

言うことだけ言って学食をとっと出て行ってしまった。

「訳がわからん。」

ぽつりと一夏が呟いた。

「ただいま。」

「おかえりー！」

部屋は真っ暗だった。奥のベッドに美音がいる事はすぐにわかった。

「なんで電気を付けないわけ？」

「電気はつけないでね」

「また？」

「いいじゃない。ねえ、鈴血を頂戴」

「バンパイアか」

ペシと鈴は美音の頭を軽く叩く。

「バンパイアよ。あたしはだって昼間は活動できないしね」

「ごめんね」

「え？　なんで謝るの？」

隣に座る鈴に美音は訊いた。

「だって、一夏に言っちゃったの美音の病気の事」

「そつ。ねえ、鈴」

「なに？」

「お月様綺麗だよ」

窓の外から目を離さなかった美音がふとそんな事を言って鈴もつられて窓の外を見る。

「あ、本当だ」

それからしばらくふたりは窓の外を眺めていた。

「鈴」

「なに？ 美音」

「私、隠してた事があるの」

「なにを？」

「あたしね……………もうすぐ死ぬの」

「え！？」

鈴は驚いて美音の顔を見る美音も鈴の顔を見ていて目が交差した。

「最近ね病状が良くないのもうダメだと思う。」

にははつと笑って美音は言葉を続ける。

「だからね。鈴あたしの最期をお願い聞いてくれる？」

「え！？ ちょっと状況が飲み込めないんだけど！？」

美音は鈴の言葉を無視して続ける。

「お願いって程の事じゃあないんだけどね。この事は一夏には言わないでね。」

そして、鈴の肩に頭を乗せる。

「それと、あたしが死んでも泣かないでね」

「ちょっと待ちなさいよ!？」

「ごめん、眠くなっちゃった。このまま寝るね」

そのままの体勢で眠りに付いた美音、ひとり取り残された鈴は、ぐるぐると頭の中でいろんなことを考えていた。

(え!？ ちょっと待ってよ。 美音が死ぬの!？ なんで？ 訳が分からないわ……………)

目だけで美音を見る。

涼やかな顔で寝息を立てる美音の顔がある。
それに寄りかかるように鈴を頭を預ける。

(嬉しそうな顔で寝るなバカ。悩んでる自分がバカみたいじゃないのよ)

「おやすみ。 美音」

そつとベッドに寝かせて鈴も寝間着に着替えて眠った。

転校生はダブル幼なじみ（後書き）

どうでしたか？

美音の設定は他の小説を書いてる時にはずっと頭に出てきて、そして
ら書かずにいらなくなったのでつい書いてしまった……。

まあ、それでは次回お会いしましょう。

決戦！ クラス対抗戦！？（前書き）

二作連続で書き上げたので少しばかり微妙です。
だけど頑張ります

あ、あと一夏のキャラが全然違いますよ。

では本編どうぞ。

決戦！ クラス対抗戦！？

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせはまさかの一夏と鈴だった。

「まさか、鈴と当たるとはね。」

小型モニターでリアルタイムで試合をはじまるのを待っている美音。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーツと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に一夏と鈴は動いた。
ガギンッ！！

「へー、やるね。一夏もまあ、出来て当然か千冬の弟だしね」

バシユツと音を立ててピットに入る。

「なんだあれは……？」

ピットに入るとリアルタイムモニターを見ていた箒がつぶやく。

「あれは中国が開発した『衝撃砲』よ」

「美音！？」

「美音さん」

「やあ。箒、セシリア」
小型モニターをポケットにしまい、同じくリアルタイムモニターで試合を見る。

「さて、試合はどうなるかな？」

「美音はどっちが勝つと思う？」

「うーんと、一夏だね」

箒の質問に少し考えてから答えた。

「なぜですか？」

「何故って。一夏だから」

答えになってないのは自分でもわかっている。

ズドオオオオオンッ！！！！

「な、なんだ！？」

「なんなんですか！？」

「……………」

突然大きな音と共にピットが揺れた。

リアルタイムモニターではアリーナの中央がもくもくと煙を上げている。

「システム破損何者がアリーナの遮断シールドを貫通してきたもよう」

「織斑！ 凰！ 試合は中止だ今すぐピットアリーナから脱出しろ！」

『 いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます』

「だが………」

珍しく食い下がる千冬の肩に手が置かれる。

「千冬、一夏に任せてあげて、鈴も居るしね」

「美音」

「いざという時はあたしも出るからね。 山田先生、状況を教えてください」

美音はそう言うのと千冬から離れて、山田先生の隣に行く。

「は、はい。えっと、遮断シールドがレベル4に設定されていてしかも、扉がすべてロックされています。 あのISの仕業だと思います。」

「これじゃあ避難も救援にも行けないわね………」

美音は少し考えてから言葉続けた。

「システムクラックはやってますか？」

「ええ、やってますがいまだに解除出来ません。」

「わかりました。山田先生、そこどいてくれますか？」

「え？」

「あたしがここから遮断シールドを解除します。」

「え、でも」

たじろぐ山田先生を無理やりどかして席に座る。

「さて、やりですか。千冬、ブック端末持ってますか？」

「あ、ああ」

ブック型端末を美音に渡した。

それを受け取った美音は素早くコードを繋いだ。

「セシリア、準備しといてね」

「わたりましたわ。でも本当に出来ますの？」

「ん？ 出来るよ。ウィルスぶち込めば」

ポケットから小型モニターを取り出して端末に繋げる。

「ウィルスって本当に大丈夫なの！？ あれ箒さんはどこに？」

「大丈夫大丈夫、でもウィルスなんか使わなくても………はい、できた」

遮断シールドが解除できたみたいで画面は赤色ではなく通常の色に戻っている。

「さて、行くわよ。セシリア」

「わ、わかっていますわ！」

「美音、待て」

「なんです？」

「出て大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないですよ。リミット時間は1分くらいですね」

にははって笑ってブイサインをする。

「なら」

「千冬さん。いかせてください」

さつきとは違い真剣な顔で言われたので千冬は黙って頷いた。

「行くわよ。」

先にピット前の廊下に出ていたセシリアと合流してアリーナまで走る。

「美音さん。凄いですね」

「なにが？」

「遮断シールドの解除に5分もたたずにやってしまってますから走りながらセシリアが話かけてきた。」

「あ、あれね。あたし、とある事情でひきこもりしてたからその時身に付けた物よ。」

「ひきこもり！？ 美音さんが？」

「ええ、そうよ。」

「人には色々あるんですね」

アリーナの入り口に着いたふたりは同時にISを展開した。

「セシリアのISって『ブルー・ティアーズ』よね」

「ええ。そうですね。美音のISはなんて言うんですか？ 真つ黒ですけど」

「あたしのISは『死神』（ハデス）死神って意味よ」

「なんだか、凄いですわね」

引きつった笑顔で返すセシリア。

「まあ、いいからとつとやるわよ。あたしがつつこむから援護頼むわ」

「了解ですわ」

セシリアの返事を聞いて美音は武装を展開する。死神が持つ鎌だが、反りがないだけ、その柄には鎖が巻かれていて鎖の先端に短刀が付いている。名前は『デスサイズ』

「なんか、武装まで凄いですわね。」

「言つとくけど、あたしのISはこの武装しかないわよ。」
鎖をほどき鎌をくるくると回しながら言う。

「他の武装とか、インストールしてないんですの？」

「違う、バススロットが空いてないだけよ。なんかバススロットの処理をすべて使って『デスサイズ』を容れたみたいよ。」

「は、はあ……………」

「あたしのISは衝撃砲なんて乗ってないから射撃の方は頼んだわよ」

そう言つて鎌を乱入者に投げる

「今度はなんだ!？」

「この鎌は……!？」

「鈴、一夏はなに遊んでるのよ。」

アリーナの入り口から青いISと黒いISが出てくる。
青い方はセシリア、黒い方は美音。

「美音!？」

「アンタなにしにきたのよ。日光に当たれないくせに」

「助けに来たのにその言い方は無いと思うな」鈴。それにあたし、
1分しか日光に当たってられないからやるわよ」

思いっきり鎖を引っ張って乱入者の体勢を崩す。

「ほらほら、もう一回あたしの鎖で踊りなさい」

今度は短刀の方を投げる

「一夏、いまよ。あんたの零落白夜で落としなさい。落とせなかったら死ぬ」

「なんて、暴言だ。だか、やるよ!」

一夏は雪片式型を強く握り零落白夜を発動させた。

「うおおおおっ!」

瞬間加速を使い一気に乱入者に近づき鎖ごと切り裂く。

切り裂かれた乱入者はドンと言う音を立てて地上に落下する。

「はっ、はっ、はっ。終わ」

敵ISが再起動を確認！ 警告！ ロックされています！

「!？」

「言っただしょ!! 一発で落とせと、一夏は爪が甘いんだから！」

遠くにいたはずの美音がいきなり姿を表した。
黒い煙を纏いながら。

「死ね！」

鎌が黒く光乱入者を真っ二つに切り裂いた。

それでやっと動きが止まったが、ボタンと俺の目の前で美音が倒れた。

「美音!？」

「美音さん!？」

「一夏! 早く美音を木陰に!!」

「お、おう!!」

一夏は美音を抱えて瞬間加速でアリーナの壁の影に美音を降ろす。

「美音!？」

「にははっ、一夏。ちょっと頑張り過ぎちゃった。」

「しゃべるな!」

ISはすでに粒子となってネックレスになっている。

「あ、ヤバい。体が熱くてヒリヒリする」

手や足は赤くなっている火傷をしているみたいだ。

「とにかく、早く医務室に!」

「だ、大丈夫……だよ。氷と………冷えピタ持ってきて……」

息が荒くなり切れ切れに美音は言葉を紡ぐ。

「どこが大丈夫だ!! 黙ってる今医務室に連れてくから!!」

一夏はガバツと美音を抱きかかえて医務室に向かって駆ける。

「きゃ、一夏……強引……」

「口だけは元気だな!」

「それだけが……あたしの……とり……。」

ぷつぷつと美音の声が消える。

それは美音が意識を失った事だとすぐにわかった。

「美音！？　しっかりしろ！！」

だが、今の一夏にはそんな事わからない。

「おい、なんとか言えよ！！　美音！！」

そうこうしている内に医務室に付き急いで美音をベッドに寝かす。

「先生、お願いします。」

「わかりました。外に出ててください」

「え、そばに　」

「いいから外に！！」

「はい」

一夏は食い下がろうとしたが先生に強く言われ渋々外に出た。

「美音は？」

「ああ、鈴か……　今医務室の中だ」

「そう」

「あいつ死ぬのか？」

「わからない。でも、美音はもう残り少ない命とか言ってたわ」

「俺、本当に何も知らなかったんだな」

ずるずると壁に寄りかかって崩れる。

「アンタには知られなくなかったみたいよ。ずっと隠してたし」

「なんでだよ。あいつ、そんなに俺のこと信用なかったのかよ」

ドンつと壁を叩く。

「アンタ本当鈍いわね。信用無かったんじゃないかって好きだったから、言わなかったのよ。」

「好きだったらなんで言ってくれないんだよ。」

「アンタの考えが美音にはわかってたからよ。」

呆れながら鈴は続けた。

「考え？」

「アンタ再会した日の夕飯の時美音事あたしになんて言った？」

「支えたいし守りたいと言った」

「それよ。美音は普通に接して欲しかったんだと思うわ。病気だからって特別扱いして欲しくなかったのよ。アンタは絶対にそういう事するから」

「……………」

一夏は黙ってしまった。確かにしそうだと思ったからだ。

バシユッ！！

「先生！！ 美音は！？」

医務室から出ていた先生に一夏は聞く。

「今は寝ていますので面会してもいいですがお静かにお願いします。」

「はい」

「わかりました」

鈴と一夏はそれぞれ返事をして医務室にはいる。

カーテンで仕切られてる空間の中に美音が居るのがわかるが一夏は入ろうとしない。

「どうしたの？ 入らないの？」

「いや、どんな顔して会えばいいかわからない」

「普通に入ればいいじゃない。いつもみたいに抜けた顔でさ」

「抜けた顔って……お前なあ……」

はあっとため息を漏らしてカーテンを開ける。

そこには額には冷えピタ腕には点滴をしている美音がベッドに寝ている。

「一夏は見るの始めてよね。美音のこんな姿は」

「あ、ああ。」

一夏は顔を伏せてる。

「今日のは軽い方よ」

「そうなのか……。」

「ええ。一夏アンタのおかげよ。」

「え！？」

ぱっと顔をあげる一夏。

「アンタが美音を守ってくれたからよ。ありがとう一夏」

「お、俺はなにもしてない」

「まあ、いいわ。座りましょう」

鈴は椅子を二客取り出して一夏に座らせる。

「ありがとう。鈴」

「どういたしまして」

一夏は座り美音から目を離さない。

「ねえ一夏、キスしてあげようか？」

「なっ！」

ガタガタ!!

「なに焦ってるのよ」

椅子から転げ落ちた一夏を鈴は覗きこむ。

「あ、焦るだろ!？」

「なんで焦るの？ 美音とはしてるんでしょ？」

ずいっと一夏に顔を近づける。

「お前は、なんで好きでもない奴とキスしようかなんて言えるんだよ!!--」

「好きでもない奴か………んぐつ。」

「!?!?!?!?!?」

一夏は状況がわかっていないがキスをしている。鈴から一夏に。

「こ、これは妹を助けてくれたお礼よ……。」

鈴は顔を真っ赤にしてそのまま医務室を出て行く。

「あ、あいつお礼って言うてたが……あいつファーストキスだろ？」

（き、キスしちゃった。一夏とキスしちゃった！）

医務室前の廊下で鈴は両手で頬を覆ってクネクネと身をよじっている。

（あ、どうしよう。ドキドキが止まらない！）
バシッ！！

クネクネと身をよじっていた鈴の頭に出席簿が振り下ろされた。
やったのは当然千冬だ。

「いたっ！！」

「なにをやってる。凰」

「お、織斑先生……」

「美音はどうなんだ？」

「今、医務室のベッドで寝ています。」

「そうか。なら美音が覚めたらいつも飲む物でも買ってきたらどうだ。幸いここにもあるぞ」

美音はいつも倒れるとなんか変わった炭酸水を飲む確か名前はチエなんとかだった気がするわ。

「あれが、ここにもあるのね……。買ってきます。」

あたしは財布を確認してから自販機にダッシュした。

「廊下は走るな！」

「は、はいっ!!」

千冬に怒られ早歩きをして角を曲がるとダッシュした。

「やれやれ」

はあとため息を漏らして千冬は医務室に入る。

「織斑、美音の様子はどうか。」

「千冬姉。今は寝てるよ」

「そうか、一夏全部鈴に教えてもらったか」

「ああ」

「美音は、お前の事をよく知ってただろ？　どんな性格かとか色々とな」

千冬は一夏の隣に座る。

「千冬姉は知ってたのか？」

「まあな。」

「そうか。俺そろそ部屋に戻ります。」

「起きるまで待たないのか？」

「合わせる顔がないんです」

そつと一夏は席を立ちカーテンに手をかける

「ならば、夜こいつは散歩をする。その時に会えばいい。それまでにお前がどうしたいか考えておけ」

「わかりました」

そう言つて一夏は医務室を後にした。

「あれ、一夏もう帰るの？」

「ああ、用事を思い出したから」

医務室の前の廊下でばったり鈴と会った。手にはなんだかわからない飲み物が入ったペットボトルを持っていた

「そう、じゃあ明日ね」

「おう。明日な」

鈴は医務室に一夏是一年寮に向かった。

「織斑先生、美音は起きました？」

「いや、まだだ」

そう言つて千冬は立ち上がる。

「私は後片付けがあるから仕事に戻る。美音が目を覚ましたら、部屋に戻っていいぞ」

「わかりました。」

そう言い残して千冬は医務室から出て行つた。

それから数分後。

「……ん？ ふあゝ」

「起きた？ 美音」

「うん、てかまだあたし死ななかつたんだ。」

体を起こして背伸びをする。

「バカな事言わないの。ほら、これ」

先ほど買った炭酸水を渡す。

「おゝ、これこれ。倒れた後のこれがいいんだよね」

「あんまり倒れないでよね。本当」

「はいはい……………ぷはあゝ。美味しい」

「よくこれ飲むわね。
なんかあたしは嫌だ」

「そう？　美味しいのに」

そして、飲み干す。

「鈴なにか良いことあったの？」

「な、なによ急に！？」

「だって、雰囲気が違うから。もしかして一夏とキスしたとか？」

「……………」

こいつ、変なところで鋭いんだから！！

「鈴？」

「そんなわけないでしょ！？」

「そつだよね。そろそろ帰ろうか」

「ええ」

美音はベッドから降りて鈴と並んで部屋に戻った。

学園の地下50メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したISはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから2時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……………」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもよりも幾分きびきびとした動作で入室した。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった」

「はい。あれは 無人機です」

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術。遠隔操作と独立稼働。そのどちらか、あるいは両方の技術があのかの謎のISに使われている。その事実、すぐさま学園関係者全員に箱口令^{かんこうれい}が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。美音さんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ な」

そう言つて千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

「はあ。一夏に知られちゃったなあたしの病気のこと……………」

ため息を漏らしながら夜の学園を歩く。

「それにしても何でだろう？ あのISが無人機だって瞬間的にわかったんだよね」

アリーナに出た時なぜか無人機だと感覚でわかったのだ。

「よ、よつ。美音」

「あ、一夏」

林に通じる道で一夏が待っていた。

「なんでこんなところに居るの？」

「千冬姉が美音はいつも夜散歩するって言ってたから。会いに来た」

「一夏……。あたしも会いたかった。本当はあのまま死ぬんじゃないかって思っちゃったら急に怖くなったの……………死ぬ覚悟は出来てたつもりなのにね」

「死ぬのはみんな怖いんだよ。いくら覚悟が出来ていてもな」

「ねえ一夏……………キスして」

一夏の前に立ち顔を突き出す。

「言われなくても」

一夏は美音の顔に近づきキスをする。

「……あつ……一夏ダメ変なとこ触らないでよ」

「良いだろう?」

「あつ、だ、ダメ。こ、こんなところで……。」

「感じてる癖に」

「あつ、う、うるさい。感じてなんかないもん。」

ストーンと地面に座り込む。

「感じてるんじゃないかよ」

「うつ……うつ、うるさい」

美音はぷいっと横を向く。だけど、その顔は赤く照れているようだ。

「俺の事嫌いか?」

「嫌いじゃないけど……」

「なら、いいだろう?」

「ダメっあつ、ああつ」

無理やり立たせて服の下に手を入れる。

「いや、ダメだつて！」

「もうやめることは出来ないな」

「いや、ちょっとこんなところで脱がさないでよ」

「ごめん、我慢出来ない。美音も我慢出来ないだろう？　こんなに濡らして」

クチャと音になる。

「あつああつ。い、一夏のバカ……」

「本当口だけは達者だな……していいよな？　この前から誘ってるんだしね」

「……こ、ここじゃあいや」

「じゃあどこがいいんだよ」

「……自分で考えろ！　エロバカ一夏！！」

そう言つて服を直して寮に向かつて歩き始める。

「お、おい。美音!？」

「空気が読めない男は火にあぶられて死ね。」

そう言い残して歩きはつていった。

「相変わらずひどいな美音は。あの時はよかったのに」

そうつぶやいて一夏は追いかけてようとしたがやめた。

空気を読むために。

「本当一夏は空気読めないんだから。女の子がいやって言つても押し切るのが男なのにまったく。」

ぶつぶつと言いながら寮に向かつて歩く

「なによ。『じゃあどこがいいんだよ』よ。まったく押し切りなさ
いよ期待してたのに」

その後の流れを想像したのか美音はボツと赤くなる。

「うつ……。一夏のバカ。あそこ以外に2人つきりになれるとこな
んでないのに……。」

ふと、足を止めた。

「もう残り少ないて言うのに……てか、追ってきなさいよね！本当空気読めないは、もうかえって寝る！」

そしてまた足を動かして部屋に戻ってすぐに寝た。

一夏が恋しくなってしまう前に。

決戦！ クラス対抗戦！？（後書き）

一夏のキャラがwww

弾に似てきた……。

少しエロいけどこのままヒートアップしていいことと思います。
では、次回にお会いしましょう

転校生はブロンド貴公子

「皆さんおはようございます」

「「「「おはようございます」「」「」

朝、山田先生のSHRが始まった。

「今日は転校生を紹介します。」

ざわざわとクラス中が沸く。

「お静かに！！では、入ってきてください」

山田先生の言葉に促されてドアから【2人】の転校生は入ってきた。
だがそれ以上に問題は1人が男だからだ。

「シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」

「お、男？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の人が居ると聞いてフランスから留学してきました。」

シユタ

「ふん。そうなんだ。あたしは凰 美音よ。よろしく」

あたしは一番奥の廊下側からジャンプして転校生のシャルル・デュノア君の前に降り立つ。シャルル・デュノア君は少し驚いたけど笑顔で返してくれた。

「よろしくね。鳳さん」

「あ、あたしの事は美音でお願いね。二組にあたしの姉が居るから」

「わかったよ。美音さん」

「ところでシャルル・デュノア君聞いていいかな？」

さつきから疑問に思っていた事を切り出す。

「なにかな？」

「君って本当に男？」

「そ、そうだよ」

びくんと身体を振るわせるシャルル・デュノア君

「ふん。まあ、いいや。良かったらあたしのせ」

バシン！！

「いた！！」

「変なことを口走るな美音」

「はあい。千冬」

叩かれた箇所を撫でてシャルル・デュノア君の隣に居る銀髪の女の子を見る。

「で、君は？」

「……………」

ちらりとあたしを見るだけでなにも言葉を発しない。

「ラウラ。挨拶しろ」

「はい。教官」

「ここではそう呼ぶな。私はもう教官ではないしお前は一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

シーンと静まり返る。

「い、以上ですか？」

「以上だ」

そして目の席に座っている。一夏に目についた。

「貴様！！」

スタスタと近づき

「やらせないよ」

振り上げた腕を美音が掴む。

「あたしの旦那（一夏）になにするの？」

「フン」

そしてまたスタスタと自分の席に座る。

「え、えーっと……」

「山田先生。続きを」

「あ、はい。えーっと今日はISの起動訓練をしますのでISSーツを着て運動場に集合してください」

「」「」「はい」「」「」

「あ、シャルル・デュノアですよろしく」

「挨拶は後でいい。今から女子が着替え始めるからどうぞ」

一夏はシャルル・デュノア君の手を引いて教室を出た。

「さて、あたしは見学っ」と

「待て、美音」

「なんですかあ？」

「新しいISスーツだ」

「ぶー。要らない」

「いいから着てみる」

「はあい」

美音は千冬から新しいISスーツを受け取り着替え始める。

「わーあ。美音ちゃんの肌綺麗」

「真っ白だ。妖精みたい」

「みんな大袈裟だよ」

美音はそう返してISスーツを着る。

「なにこれ着にくい!!」

両手両足は手首足首まですっぽりと覆われていて出ているのは顔と手と足だけだ。

「どうだ？」

「どうだって。着にくい」

「だろうな」

「だろうなって千冬！？」

「でもそれで当分は動けるだろう」

耳元で千冬そう伝える。

「まあ、確かにそうですけど……………」

そんなこんなで第二グラウンド。

あたしはみんなから離れた日陰にいる。

「太陽なんて嫌い」

今日はちよつと日に当たっただけで肌が赤くなった。

「まったく。なんであたしがここにいるんだか」

普通だったなら。教室でお休みしてるのに

「美音！！ ISを展開してこっちに来い」

「はぁーい」

IS（死神）を展開して千冬の元に降り立つ。

「今から戦闘を実演してもらおう。美音と鈴音」

「なぜあたしまで!？」

鈴千冬の気まぐれだから仕方ないよ。

「鈴あきらめろ」

ブンブンとあたしは武装の鎌を回す。

「ちょ、美音!! 危ないからやめなさい!!」

「らいじょうぶよ」

「それを言うなら大丈夫ね。てかあんた頭でも打ったの」
「で、千冬。相手は？」

鈴の話のスルーして千冬に振る。

「今に来る」

キュイイイイイ!!

「なにこの音は!？」

「ど、退いてください!!」

「一夏!!」

バシユと鎌を投げて捕まえて自分の方に引き寄せる。

さっきまで一夏がいた場所には山田先生が転がっている。

「一夏大丈夫？」

「おう。美音助けてくれてサンキュな」

「にはは。一夏を助けるのは当然だよ」

「そこ!! いちやつくな!!」

離れていた鈴の怒鳴り声が聞こえる。

「一夏。鈴がひがんでるよ」

「そう言われてもな……」

「このヘタレ一夏」

「ヘタレ言っな」

「こうすれば良いのよ」

そう言ってあたしは一夏に顔を近づける

バシバシ!!

「場所を考える。馬鹿者」

「いや、諦めて貰おうかなって思ってたね。みんなに」

「いいから場所を考えろ」

「はいはい」

千冬は、はあとため息をついて言葉を紡ぐ。

「山田先生と模擬戦闘をしてもらっ。準備はいいか？」

「OKよ」

「いや、二人係はちょっと」

「大丈夫だ今のおまえならすぐに負ける。」

「むっ!!」

鈴は千冬の言い方がカンに障ったのかムスツとした顔をする。

「はあゝ。あたしは教室で寝ていたいんだけどな」

「では、はじめ！」

号令と同時に鈴は飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た。ただ一人地上に居る美音は鎌を振り回している

「さてと、どうしようかな」

ブンブンと鎌を回している美音。

「投げる事にしよう」

そう言つて鎌を山田先生に投げる。

「はっ」

山田先生は短く吐いて交わす。

「もらいー」

その隙を見逃さずに鈴の斬切りが入る。

「はい」

ひょいと鈴の斬切りを交わす。

「チッ」

「大丈夫よ」

地上にいた美音が山田先生の後ろにいた。
あの時と同じ様に黒い煙を纏つて。

「え」

「先生の負けです」

鎌を振り下ろす。

「山田先生。相手が悪かったな」

先ほどの試合に負けてしょげている山田先生を千冬が慰めている。

「しょせん私なんて……」

「勝っちゃいけなかったのかな？」

「いや。お前なら勝てて当然だろう」

「そうなんですけど……」

山田先生のしょげ具合を見ると勝っちゃいけなかったみたいに感じる。

「まあ、いい。それではグループでISの起動と歩行訓練をしてろ。グループリーダーは各班の専用機持ちがしろ。ただし、美音は数に入れるなよ。」

「……はい」

元気よく返事をする一二組の生徒達。

「あたしはそろそろ日陰に戻らないと」

「大丈夫か美音」

「大丈夫よ。一夏」

ひらひらと手を振ってさっきいた日陰に戻りISを解除する。

「疲れた……………」

体操座りで呟いて空を見上げる

「教室に戻ろ…………それに居心地悪いし」

遠くに居る一二組の生徒達がこっちを見ながら喋っている。

「どこに行っても変わらないか」

小学校に入る前に発病したこの病気はそれ以来人間関係をぐちゃぐちゃにした。一番最初は自分で抱えて自殺未遂もした。それから鈴や両親に支えられて此処までこれた。けれど他人はわかってくれない。わかっていても理解はしてくれないのだ。

「もういや。こんな生活」

立ち上がってそのまま校舎には向かわず寮に向かった。

「馴れていても辛いな……………」

ISスーツのまま布団に潜った美音は…………泣いていた。

「学園辞めたいな…………もうどうでもいいよ残り少ない命なんだし……………」

それから美音は声を殺していつものように泣いた誰にも聴かれずに誰にも知られずに。この気持ちが分かるのは自分だけ、鈴や一夏そして千冬には絶対にわからない事だ。それから数時間。

「グスン……………久しぶりに泣いたわ……………すっきりはしないけど」

いつもそうだ。泣いてもすすきりしない。いつももやもやが心の中に残っていて消えない。

「服取りに行かないと……………もう授業終わってると思うし」

そう言ってごしごしと目をこすり部屋を出た。

「え！？」

部屋の前にいた人物に目を疑ったそこには

「い、一夏」

「おう。鈴に頼まれて服渡しに来た　美音？目、赤いぞ」

そこには紙袋を下げた一夏がいた。

「ありがとう。ちょうど取りに行くところだったのよ」

一夏から紙袋を受け取り元、奪い取って部屋に入ろうとする美音の腕を一夏は掴む。

「美音、どうしたんだよ。目、赤いぞ。見せてみるよ」

「なんでもないから、離して」

「いいから見せろ」

「いいから、離して!!」

いきなりの大声にびくんと身を震わせる一夏だがその腕は離さなかった。

「なんなんだよ！俺はそんなに頼りないのかよ！」

「違う!!ただ話したって理解なんてしてくれないだけよ!!」

いくら病気の事を知っていたってあたしの気持ちなんてわかりはしない。

「理解ってお前の病気の事だろう？俺は理解してる。だからお前を支えるため」

バシンッ！

「支えるなんて二度と言わないで!!どうせ出来もしないんだか

ら!!」

ボタンッ!!

美音は一夏の腕を振り払いドアを思いっきり閉める。ついでに施錠もする。

「おい、なんなんだよ!? 急に!」

「うるさい!! しゃべるな!! この部屋に近づくなそしてあたしにも近づくな!! 一夏なんて大ツツツツ嫌い!!」

「なんなんだよまったく」

これ以上の追及をやめて一夏は部屋に戻った。

「一夏のバカ……………」

家の両親も支えると言いながら離婚して「あたしを押し付けあっていた」だから美音や鈴は出来もしない約束はしたくない。ましてや、病気のことは一番嫌だ。

「誰もわかってくれないわよね……………鈴だってわからないのだから他人なんてなおさらよね」

自分のベッドに座り確信の持ったつぶやきをする。

「一夏に強く当たっちゃったな……………もうどうでもいいや。死にたい」

そう言つてふらりと立ち上がり引き出しを開けてあるものを出す。
それはカッターナイフだ。

カリカリカリカリカリ

カッターナイフの刃を出して手首に当てる。その手首には切り傷が
たくさんある。

「ちよつと美音!? なにやってるのよ!？」

「……………あ、鈴」

「やめなさい!！」

鈴は美音のカッターナイフを持つ手を掴む。

「鈴離して、あたし生きていくの疲れちゃったから死にたいの」

「なに言ってるのよ!! いいからこれをあたしに渡しなさい!」

「いやあ……………」

鈴が掴んだ手の上から美音は掴む。そして自分の方に引っ張る鈴も
負けじと引っ張る。そして……………。

「っ痛い!」

案の定鈴はカッターナイフの刃で切ってしまった。

「大丈夫鈴！」

カッターナイフを捨てて厩に近づく。

「う、ごめん……鈴」

鈴の前に崩れる美音。鈴は手のひらから血が流れている。

「いいから……包帯持ってきて……」

脂汗をかいて止血をしている。

「わ、わかった！」

ばたばたと引き出しを開けて包帯を取り出す。

「ほら、貸して」

「うん」

鈴の手のひらを止血するよつにきつく巻く。

「うまいわね」

「経験者ですから」

手首の傷リストカットを見せる。

「気づいてあげられなくて本当にごめんね」

「どうせ、誰もあたしの事なんてどうでもいいのよ。……はい、できた。」

「どうでもよくないわよ!」

「でも、あたしの気持ちはわからないでしょ？ あたしが鈴の気持ちかわからないように」

「……………」

包帯を片付けて鈴の隣に座り地面に落ちている血を拭く。

「あたしなんで一夏の事が好きなんだろう？ その前に好きってなに？ 愛ってなに？」

「そんなものあたしにだってわからないわよ」

「そうだね……。ペろり」

手について血を舐める。

「あんた……………」

「血って美味しいのよ」

「やめなさい」

「あたしは夜の住人。ねえ鈴、血を頂戴」

美音は身を乗り出して鈴に迫る。

「え、ちよつと!」

「ぶつ、冗談よ」

ふうーって胸を撫で下ろす鈴

ぎゅっ。

「ちよつと、美音! ? なによ急に」

「少しだけでいいから抱きつかせて、お願いねえちゃん」

いつも強気の美音にしてはおかしな言動であり行動だった

「どうしたのよ、いつものあんたらしくないじゃない」

「どうもしないわよ」

「さっきの授業の事は気にしないのよ」

「そんなんじゃないわ、ただなんとなく」

「嘘ね。あんたは嘘つくのが下手だもん。」

「嘘じゃあないもん。ただ……」

美音はぎゅっと鈴の胸に顔を押し付けてうずめる。

「ただ？」

「1人になる事が今更怖くなっただけよ」

美音は鈴の背中に回していた腕をぎゅっと締める

「大丈夫よ。美音は1人じゃあないわよ」

「ありがとう。鈴……」

「お礼なんていらないわよ」

そつと頭を撫でる鈴。

「だけど、あたしは1人なのよ。いつもどんな時でもね。夜しか行動出来ないのだから」

そつ、あたしは夜じゃあないと行動が制限される。昔は違ったが今はそうってしまったのだ。

「そうね。それでも1人なんて言わないでよ。悲しくなっちゃうから」

「私、鈴が好き……一夏も好きだけど鈴も好き」

押し殺していた感情が一気に吹き出す。

「それって……………恋愛対象として？」

「あたしもよくわからないの……………他の兄弟とは違うのは確かよ」
顔をあげて鈴を望みこむその顔は焦りが見えていた。そして引いていた。

「やっぱりか……………」

ぼそりと呟いて鈴から離れる。

「美音？　今なんて？」

「冗談よって言ったのよ」

（やっぱり、あたしの気持ちや感情を理解してくれるのはあいつだけね……………今はもう大嫌いだけど）

そう心の中で思いながらベッドに潜り込む。

「今日はもう寝るから」

「午後の授業は！？」

「でるわけないでしょ？　だるいし」

「また……………わかった。報せとくわ」

そう言って鈴は部屋を出た。

「^{クウヤ}空也……………」

美音の唯一の理解者であり美音の初恋の相手だ。ぼそりと呟いた名前は誰も聞かれずに消えた。

またまた転校生！？（前書き）

さて、お待たせしました。

あまりエロくないですが。どうぞ

またまた転校生！？

「えーつとですね……………今日もまた転校生を紹介します……………」

「え……………」

「「えええええええええっ！？」」」

つい先週2人の転校生を迎えたのにまた転校生が来たのだから驚くのは当たり前か。

「失礼します」

クラスに入ってきた転校生を見て、あたしは持っていたシャープペンを落とした。そしてクラス全員のざわめきがぴたりと止まった。それりやそうだって。

だって、あたしの知ってる顔だししかも 男なのだから。

「秀榮 空也（シュウエイ クウヤ）です。どうぞよろしく願います」

「な！ なんであんたが……………」

あたしはつい立ち上がり聞いてしまった。

「僕もISが起動できたからだよ。美音」

「嘘でしょ……………」

「なんで嘘を言わないといけないのかな？ 僕のハニー」

「キモ、あたしを呼ぶなこのたらしが！！」

あたしは寒気がして身震いがした

なんでこんな奴に初恋をあげたのだろうかあー……あたしの黒歴史が……。

「な、たらしとはひどいな。純粹に女の子が好きただだよ」

鈴は知らないがこいつは極度の女好きだ。知ってるのはあたしただけだけど、あたしのことを理解してくれてるのもこいつだけだ。複雑な気分だわほんと。

「千冬！！ こいつを追い出して！！ こいつがいたら学園の女子が襲われるわよ」

教員までと付け足す。

「考えておく。美音そろそろ時間だぞ」

千冬は壁掛けの時計を見てあたしに知らせる。

「あ、ほんとだ。」

腕時計を見てあたしは頷く。

「じゃあ今日も早退でよろしく。あと、こいつの部屋を絶対にあたしか一夏の部屋にしてよね。じゃないとその子襲われるから」

あたしは千冬にそう言い残して教室を出た。

「千冬姉」

バシンッ！

「織斑先生と呼べ」

「はい。それで美音どこ行くんだった？」

美音がでたあと一夏は千冬に聞いた。その言葉を聞いて空也が反応した。

「君が織斑一夏か美音のことなにも知らないんだね。いいよ。教えてあげるよ」

空也は一夏の前に立ち言葉を続ける。

「美音は今日は病院に行ったんだよ。定期検診ってやつだ」

「へー、そうなのか。」

一夏は空也の言葉を聞いて納得したのか手を叩いた。

「君は美音の病気の事を知ってるのか？」

「当たり前だ、あいつとつき合ってるみたいな俺が知らないでどうするんだよ」

「み、美音の彼氏……だと……」

「彼氏じゃねえよ。みたいな者だよ」

肘をついて一夏はそう言った。美音との約束だからだ。

「そうかそうか、ならば奪っても構わないな」

「出来るものならな。てか、早く席に戻れよ」

空也の後ろには千冬が構えていた。

「わかつている！」

そう言つて早足で空いている席に空也は座った。

「で、ではHRを終わりにする」

空也が席に座つたのを確認してから千冬はそう伝えて山田先生と共に職員室に下がった。

「美音ちゃん久しぶりね」

「ええ、お久しぶりですね先生」

この病院は日本にいた時にお世話になった病院だ。またこつちに来ると話したらあの時のように対応をしてくれると言ってくれた。

「どう？ 病状は？」

「国に帰ってから悪化しました。はい。これカルテです」

バックからA4サイズの茶封筒を取り出して主治医の金山^{かねやま}先生に渡す。

「預かりました。どれどれ」

茶封筒からカルテをだして目を通す。

「うーん。思っていた以上に悪化してるね。今年がピークか……」

あたしの余命は16年もうそんなに時間は無い。

「はい。そうですね」

「うーん。どうしようか、入院は出来ないでしょ？」

「はい、今は代表候補生なんで」

「私はあまりオススメしなかったのになっちゃうんだもん。ほんと美音ちゃんは私の言うこと訊いてくれないね」

「えー、訊いてますよー」

「どこがよ」

「あたしは日本を死ぬ場所に考えただけです。代表候補生なんて

そのための口実に過ぎませんよ」
そう、死ぬなら日本で死にたい。一夏や千冬さんに看取られたいから。

「ほんと美音ちゃんは強いわね。じゃあ仕方ない精密検査してそれに応じた薬を出すわね」

先生は机にむき直して書き始める。

「薬なんてあるの？」

「体内の火傷を抑える薬ならね」

そう言つてカルテと共に看護婦さんに書類を渡す。

「じゃあ検査室行こうか」

「はい」

あたしは先生に連れられて診察室に入る。

「じゃあまずは血液検査からね」

「はぁーい」

腕を出して注射をまつ。

「じゃあ少しチクツとするよ」

と言いながらブスッと刺す。

「ちょ、先生」

「はい終了」

「あたしこれだけは好きになれないわ」

「泣き言、言わないの」

先生が下手なんだけどね……………。

「はいはい。」

「じゃあ聴診器当てるから服捲って」

「先生、また順番逆だよ」

「大丈夫よ。ほら、服捲って」

「え」

「なによ、えゝって同じ女でしょ？ それとも彼氏にしか見せたくないの？」

先生はニヤニヤしながら言う

「そうですよーだ」

「確かー夏君だっけ？」

「そうよ！！ 先生も早く作ったら？」

「わ、私にもいるわよ」

あ、この言い方はいいわね。

「ほら、いいから捲りなさい」

「はいはい」

「うーん。当分運動禁止よ。あと、あまり日光には当たらないことね」

聴診器を外して机に置いた先生がそう言う。

「日光に当たらないのは元からでしょ？」

最近当たり過ぎてるけどね。

「そうよ、最近当たってるでしょ？」

「バレました？」

「病状診ればわかります。心臓があまり元気じゃないから運動禁止、そして日光は当分ダメ。イコール、学園はお休みしなさい」

「了解しました」

まさかこうなるとわな思わなかったわ。

「よろしい。じゃあ血液検査の結果が出るまで待合室で待っててね。」

「了解」

あたしは先生に一礼して診察室を出て待合室のソファに座る。

「ん？ あ、可愛いー」

待合室に座っているあたしから見て左前に赤ちゃんを抱っこしていた若いお母さんがいた。

「あ、あの、抱っこさせてもらっていいですか？」

「ええ、良いわよ」

「やった」

抱っこしていた赤ちゃんをお母さんはあたしに抱かせてくれた。

「お姉ちゃんは子供好き？」

「はい、大好きです。あたしも早く子供産みたいな」

「子供なんて大変なだけよ」

「そうなんですか」

「そうよ。夜泣きはするはなにやらで、それまでだってお腹は大きくなって足元見えなくて大変なのよ」

あたしがお母さんの話を聞いていると。

「お大事に」

「どうも」

診察室からお母さんくらいの若い男性が腕に包帯をして出てきた。

「どうだった？」

「しばらく安静だつて」

出てきたのを気づいてお母さんは男性に近づいた。そこで気づいた、あの男性はお母さんの旦那さんだつて。

「赤ちゃん抱かせてくれてありがとうございます」

「いえいえ。じゃあね」

「はい。お大事に」

「あー、子供可愛いな〜ちっちゃい子大好き。子供ほしいな〜」

ボスツとソファに腰を降ろす。

「作っちゃおうかな？ あー……。でも産めるかわからないからや

めよ」

「お、なんだ？やけにマイナス思考だな」

「出たねやぶ医者」

「誰がやぶ医者だ！この不良娘が」

このいかにもやぶ医者ばい医者は金山先生と同じく1年前からあたしを見ている。斎藤^{サイトウ}先生だ。ちなみに男だ

「不良でなにが悪いわけ？ やぶ医者よりまだましよ」

「この減らず口も変わらねーな。このこの」

わしゃわしゃとあたしの頭を撫でる。

「ボサボサになるからやめてくれます？」

「おー、悪かったよ。」

「悪いと思っでないでしょ？」

「いいや。思ってるよ。お詫びのしるしにこれやるよ」

そう言っでクシと手鏡を渡してける。

「先生の使い古しでしょ？ いらないわよ」

「バカいえ！　新しいのだよ」

「誰にあげるつもりだったのかしらね」

そう訊きながら斎藤先生からクシと手鏡を受け取る。

「お前にやるためだよ」

「は？」

なに今聞いてはならないことを聞いた気がする。

「勘違いをするな！　これはお前の入学祝いだよ。金山先生と一緒に決めたんだよ。」

「へー。それはどうも……ところで先生？」

「なんだよ」

ちよいちよいと手招きして先生を呼ぶ

「金山先生とは、上手くいったの？」

「……………」

「いってないんだね。ちなみに金山先生彼氏できたみたいですよ」

「なっ、なに！ー！」

バシバシ

「病院では騒がない。それと美音、余分なことは言わないの」

「はい」

斎藤先生が騒いだと同時に頭に激痛が走った。

「ほら、美音。血液検査の結果でたわよ。ほら、診察室に入って斎藤先生もよ」

「はぁーい」

「ああ」

金山先生の後続きあたしたちは診察室に入った。

「えーっと、美音」

「はい？」

あたしは何気なく回転椅子でくると回っていたら金山先生がちょつと真剣な声であたしに話しかけてきた。

「あんた、妊娠してるわよ」

「は？」

「お前、あの彼氏とか！」

「ちょっと、待って！ あたし確かにあいつとしたけど……中学二

年の時よ!？」

確かにしたけど、その時はなにもなかったのになぜ今頃？

「したのね……。嘘よ」

「なっ！ 先生!!」

「まさかあつさりと白状するとはね」

やられたわ……。不覚

「で!! 先生病状は!!」

「あらあら、焦っちゃって」

「不良娘はいつになっても不良娘だな」

「う、うるさい！ したかったんだからしょうがないでしょう!!
それに結婚もしてくれるって言ってくれたしね！」

でも、結婚なんてあたしには出来ない……。もうすぐ死ぬから。

「そう言う男ほど子供ができた途端逃げ出すのよね」

私は何人も見てきたわつと金山先生は付け足した。

「俺はそんな事はしないがな」

斎藤先生は金山先生にアピールをしているが

「それが当たり前です」

金山先生に正論を言われて撃沈。

「あたしは妊娠なんてしてないでしょ!!」

「ええ。してないわよ」

「じゃあなんでそんなに真剣な顔したのよ」

「なんとなくね。血液検査の方は目立った異常はなかったわよ。」

金山先生はカルテを読みながらそう言うのとカルテを看護婦さんに渡した。

「今日は帰っていいわよ。その代わり当分は病院に来るのは一週間に一度にしてくれるかな?」

「そんな頻繁に来るの?」

「うん。病状が悪いからね。当分はそのままかな」

「大変だな、美音」

ポンと斎藤先生があたしの肩に手を乗せる。

「一番早い方法は入院する事だけど無理でしょう?」

「はい。でも、入院するならするでいいですけど……」

どうせ学園はお休みしなきゃいけないしね。

「そう。なら今すぐにでも入院の手続きをしましょうか。斎藤先生、あの病室は空いてますか？」

「ああ。空いているぞ」

「じゃあそこに入れとおいてください」

「わかった。やっておく」

そう言つて斎藤先生は診察室を出て行つた。

「じゃあ、これに書いてね。いつものように保護者欄は書かなくていいから」

「了解」

美音は手慣れた手付きで書類を書いていく。

「出来たわ」

「ありがとう。じゃあ検査入院だから3日から4日よ」

「わかったわ。じゃあ病室に行くわ」

入院か……。好きになれないわねこれも

「ここも変わってないわね」

ここは日本にいたとき入院したら使うお馴染みの病室だ

「ここ、景色は綺麗で日光が当たらずにいいんだよね」

カーテンを開けて窓を見るちょうど太陽は病院の後ろにある。ここは絶対に日の光が注さない病室。

「あ、鈴か千冬に電話して荷物持ってきてもらわないとね」

携帯を取り出して鈴に電話をかける。

「もしもし美音なに？」

鈴はワンコールででた。

「うん。今日ね定期検診の日なのは知ってるよね？」

「ええ。昨日言ってたわよね。で、どうだったの？」

「えーっとね……。入院だった」

「え！？　ほんとなの！？」

入院と訊いて鈴は大きい声を出す。

「うん。検査入院だけだね。3日から4日だってだから、服とか持ってきてほしいのよ。頼める？」

「わかったわ。学校が終わったら行くわね。病室は？」

「いつもの病室よ」

「わかったわ」

ぷつんと電話が切れる。

「さて……と」

携帯とカバンをスタンドテーブルに置いてベッドに座る。

「やることはなにもないのだけだね」

なにげなくあたしはお腹を触る。

「妊娠か………してるわけないじゃん。」

お腹から手をどかして窓の景色を見る。

「少しばかり期待しちゃったじゃないのよ。先生のバカ」
「夏とあたしの子」

「ものすごくやんちゃな子供かもね」

少し想像をして、クスリと笑う。

「あたしも強く生きたかったな。」

まだ死んでないけどね。

「なに、黄昏てるの？」

「あたしだって黄昏るわよ。先生」

「らしくないわね。ほら、手を出して」

「はぁーい」

金山先生に言われ腕を捲り手を出す。

「らしくないのは先生が悪いんだよ」

「どうしてよ」

昔ながらの血圧計に空気をおくりながら金山先生は訊く。

「妊娠したと言っからよ」

「ごめんごめん。美音は子供好きだったわね」

いつも子供たちと遊んでるのを金山先生と斎藤先生は知っている。

「うん。だから期待しちゃったのよ」

そしてまた、窓の外の景色をみる。

ぎゅっー

「え、先生？」

「そんな切ない顔しないでよ。」

金山先生はあたしをぎゅーっと抱きしめた。

「わかった。金山先生」

「あなたはいつも笑顔でいて。私や斎藤先生はあなたの笑顔で救われたのよ。だから絶対に笑顔を絶やさないで。泣きたい時は泣けばいいのよ、だけどね。泣き終わったら笑顔をいてね」

「はい。先生」

いつもどんな時でも笑顔でいるか……。最近心がけてないわね。

「じゃあこれに着替えてね」

金山先生はあたしを離してくれてから。今度は看護婦さんから入院服を渡してくれた。

「了解した」

そこまで訊いて金山先生は看護婦さんを連れて病室を出て行った。

「さて、着替えますか」

美音は制服の帯をほどいてボタンを一つずつ外していく。そして露わになった胸とそれを包むように白いブラジャーが胸を包み込んでいる。

「また、大きくなったかも……。」

鈴の胸の大きさはAで美音がCだ。
美音はむにゅっと胸を押し上げる。

「ま、いいや」

そう言って入院服の上を着る。そして下をスカートを着たまま穿いてスカートを脱ぐ。

「お着替え完了っ」と

ベッドの布団に入る

「でもやることはない」と

1人で受け答えをされていて痛い子だと思いが入院しているときの美音の遊びである。

「ぶつ。またこんな遊びをするとはね」

「だよねー」

また1人受け答え。美音は寂しい子いつも1人。

「はあー。つまらないな」

ほんとにつまらなそうな顔して布団に潜る。

「おやすみ」

「おやすみ。美音」

そう言う1人受け答えをして眠りについた。

「織斑先生」

「なんだ、凰」

「美音が入院しました」

「ああ、その事なら今さっき連絡が来た。」

場所はIS学園の廊下時間は美音から電話があってから授業を挟んだ休み時間だ。

「それで、荷物を届けてあげたいんですけど……」

「なんだ、はつきり言え！」

齒切れの悪い鈴を千冬は少し脅す。

「はい！ 美音に荷物を届けたいので次の授業抜けていいですか！」

「ああ、行ってこい。あいつ一人で寂しいだろうしな」

にっと笑う千冬。

「わかりました。ありがとうございます」

「担任には私から言うておくから、早く行ってやれ」

「はい。それじゃあ！」

鈴は千冬に一礼して早足で寮に戻った。

「美音が入院か……あの二人に知らせるべきか知らせないべきか……」

つと千冬は呟いた。

「こんな感じでいいわよね」

一年寮の鈴と美音の部屋。

「最近、入院しなかったけどまさかこの時期にね」

今月末には学年別トーナメントがある。この時期に訓練を休むとトーナメントについていけなくなる可能性が高いのだ。

「よし、行くか。また1人受け答え遊びでもしてるんだろっしね」

見透かしたような口振りをして荷物を持って部屋をでた瞬間。

「あ」

「ん？」

ドアを開けたら目の前に一夏が歩いていた。

「い、一夏!？」

「鈴か、ん？ そんな荷物持ってどこ行くんだ？」

「ど、どこも行かないわよ」

手提げバックを持ってそれでもどこも行かない訳がない。案の定一夏に指摘された。

「どこもいかないって、お前なあ……そんな荷物持ってどこもいかない訳ないだろう？」

「とにかく、じゃあね」

一夏の話を見殺して歩き去るつもりだったが

「待てよ。その荷物よく見たら美音のだろ」

一夏は鈴の手首を掴んで止める。

「はぁー。もう隠すのめんどくさいから言っわね」

「おう」

「美音が入院したから荷物届けるのよ。」

「美音入院!？」

「ちよつと声でかい!」

「あ、悪い。どういう事なんだよ」

鈴がしーって空いていた手で口に当てる。

「検査入院なのよ。ねえいつまで腕掴んでるのよ」

「あ、悪い」

ぱつと一夏は鈴の腕を放す。

「で、当たり前だけど付いて来るき?」

「おう。当たり前だ」

鈴ははぁーとため息を吐いて一夏と共に病院に向かった。

「美音？ いる？」

「いるわよ。あいてるから入ってきて」

その言葉を訊いてすぐに病室のドアが開いた。

「一夏も来たの？」

「おう。鈴に入院したって聞いたからな見舞いだ」

鈴の後ろにいた。一夏に気づいた美音は少し驚きながら一夏に訊いた。

「見舞いつてまだ1日目よ」

ぷつと笑う美音。

「さて、荷物はこんなもんでいいでしょ？」

「いつも、世話かけるの鈴には」

「それはいわない約束でしょ？」

鈴はベッドに座りあたしの頭を撫でる。

「よししてよ。一夏がいるでしょ」

「なに照れてるのよ。」

「恥ずかしいもん。子供扱いされてるみたいで」

美音は頬を赤くして窓を見る。

「その行動が子供みたいよ」

「う、うるさい」

ぷくつと膨れる。

「あら、賑やかな」

不意に病室のドアから声が聞こえた。

「あ、金山先生に斎藤先生。お久しぶりです」

「ええ。久しぶりね鈴ちゃん」

「久しぶりだな鈴」

鈴の挨拶で金山先生と斎藤先生が順に挨拶した。

「お、こいつが家の娘の初めてを奪った」

ポフッ！！

「誰が娘だ！！ このやぶ医者が！！」

美音が思いつ切り枕を斎藤先生に投げた。

「ほんと斎藤先生はデリカシーがないのだから」

やれやれとした感じで両手をあげる金山先生。

「で、先生なに用？」

「点滴の時間よ」

「斎藤先生に頼みたいです」

金山先生下手くそだから痛いし……。これはさっき確認済みだ。

「よし、任せろ」

美音の枕攻撃から復活した斎藤先生が点滴を持って美音近づく。

「ほら、手だせ」

「はいはい」

手を出したのを見て斎藤先生はゆっくりと針を刺した。

「ほら、できた」

「どうもです」

「さて、私たちは戻るけど騒ぎ過ぎないでね」

「わかってます」

代表して鈴が言う。

「じゃあまたくるからね」

そう言つて先生たちは病室を出て行つた。

「あ、挨拶するの忘れた」

「別にいいわよ」

美音が手をひらひらと振る。

「そうか。ところでさあ。鈴に美音」

「なに？」

「なによ」

上から美音に鈴

「空也つて奴とどんな関係なんだ？」

「あ、確かあいつもIS動かしたんだってね知らなかったわ」

「あたしも、今日クラスで会ってびっくりしたわよ。で、空也とどんな関係かってねえ……」

珍しく美音が言葉を続けることを躊躇っている。

「美音の初恋の相手よ」

「なっ！　鈴！？　あたしが言うつもりだったのに！」

さらりと鈴が言ってしまった。

「なんだ、美音の初恋の人が」

「そして、元カレよ」

「そ、それは誤解よ！　ただ一緒にいただけだよ！」

美音が珍しく動揺している

「一緒にただけてあんだね……。あんな風にくっついてたら間違えられるわよ」

「あいつが無理やりくっついたのよ！　今はあんな奴大ッツツツツ嫌いよ！！」

そう吐き捨ててそっぽ向くように窓の外の景色を見る。

「はいはい。あたしは足りない物を売店で買ってくるから一夏美音

を見ててね」

「おう。わかった」

一夏の返答を聞いてから鈴は病室を後にした。残されたのはベッドの上で窓の外を見ている美音と離れた位置に立っている一夏だけだ。

「一夏……座ったら？」

美音は窓から目を離さずにそう言った。一夏は『おう』とだけ言っ
てベッドの横にある椅子に座る。

「一夏……気にする？」

「なにが？」

相変わらず窓の外を見ている美音唐突に訊いてきた。

「あたしの空也の関係よ」

「まあ、少しな」

「そう」

そう短く言ってから美音はやつとこつちを見た。

「あたしの空也の関係はね、確かに初恋相手よ。だけどつき合っ
た分けてもないから、あいつとはなにもなかったわよ」

「そう言うがあいつがお前のことをハニーと呼ぶのは何故だ？」

「それはあたしが知りたいわよ」

はあっとため息をつく。その行動は嘘偽りが無いことが確かな証拠である。

「そうか。よかったよ」

「なにがよかったの？」

「ん？ 美音が俺だけの物だつてことにだよ」

「あたしは物じゃあ無いもん」

「わかってるよ」

そして一夏は美音にキスして押し倒す。

「ちよつと、なにするのよ！」

「さあ？ 何をするんでしょうかね」

「ちよつと待つてよ。せめて点滴が終わるまで待つてよ！」

点滴はまだ半分ぐらい残っている。それをすべて終わるまでの時間は30分はかかる。

「こんなもんこうしちゃえ」

美音の腕から点滴針を抜いて点滴を止める。

「これでいいだろ？」

「いいだろ？　じゃないわよ。まったく」

はあっとため息をつく。

「だからってダメよ」

ぐいっと一夏の体を押し返す。

「なんでだよ」

「鈴が帰って来るからよ」

「わかったよ」

そこでやっと一夏は離してくれた。

「一夏、あんたねえ。外したのはいいけどつけるのは痛いよ。」

と言いながらブスツと点滴針を刺す。そして点滴を開始する。

「おま……。先生呼んだ方がいいだろう！？」

「大丈夫よ。いつもやることだしね」

にっと笑ってブイサインを作った。

「お前ってほんとすげーな……」

「……私は一夏の方が凄いと思う」

美音がそうボソツと言った。

「どこがだよ」

今の声は一夏に聞こえたらしく聞き返された。

「すべてよ。自分よりあいてを心配するんだから。でも、そういう一夏があたしは好き」

美音は顔を赤くした。それを隠すように布団に潜った。

「お前さりとはずいこと言うよな」

一夏もまた、顔を赤くしている。

「一夏はあたしのこと好き？」

美音は布団から顔をちよつとだけだして一夏を見る。その行動を見た一夏はまたしても顔を赤くした。

「お前、いつもと雰囲気違うな」

「え？　どんな風に？」

「な、なんというか……いつもやらない行動をするしなんか可愛い」

「いつものしない行動か……ねえ一夏もつと近くに来て」

トントンとここまできてと合図する。

「ここでもいいの　むぐっ!」

一夏が座り終わると同時に美音がキスをした。

「いつものしない行動はこういうものを言うのよ」

またしても顔を赤くして布団に潜った。

「そ、そうだな」

「ところで一夏。あたしのこと好きだよね？」

「ああ、当たり前だ」

「そう。よかったわ」

布団から少し顔をだして美音が言った。

「急にどうしたんだよ」

「どうもしないわよ。ところで一夏」

「おう。なんだ」

一夏が顔を覗き込むように体を乗り出す。

「あたし、妊娠したみたい」

「は？」

顔を真っ赤にした美音が振り絞って言葉を紡いだそれは先ほどの金山先生の冗談だった

「さっき先生が言ってたの」

カラン

「「！？」」

廊下から何かが落ちる音が聞こえて2人は同時に見る。するとそこには鈴が風呂桶を落としたところだった。なぜ風呂桶？

「あ、あんた……それ本当なの……？」

見るからに動揺している。

（本当は嘘だけでももう少し続けようかしら？ それとも終わりにするか）

「な、なんとか言いなさいよ！」

「鈴、病院では静かにね」

「そんなことわかってるわよ!!！」

（逆効果だったか。仕方ないネタばらししますか）

「鈴妊娠は嘘よ」

「嘘なのかよ！」

今度は一夏が反応した。

「当たり前でしょうバーカ。」

終わった点滴を外して備え付けの冷蔵庫からコーラをだして一口飲む。

「ふー。鈴も一夏もいちいち驚きすぎよ。」

（だからからかうのが面白いんだよね）

「よ、よかった」

鈴はぺたんと床に崩れ落ちる。

「お前ってほんととはあ……」

一夏も頭を掻いて鈴を立たせた。

一夏と鈴が美音対して思った事は昔と変わらず『小悪魔』だった。

またまた転校生！？（後書き）

迷った結果二人目の男子をだしてしまいました。あ、シャルルを忘れてましたね。合わせて三人ですね。
では、また次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0159y/>

鈴と残り少ない命の双子の妹

2011年11月30日16時53分発行